

# 大正浪漫漂う「雲雀丘・花屋敷」境界探索!

2017年4月2日(日)

宝塚市長尾山東端の山麓部は、大正期に拓かれた阪神間でも有数の緑濃い高級住宅地。有馬美面電気軌道(現阪急電鉄)の敷設と大阪の経済活動活況に伴う郊外型健康住宅地域創生を目指して開発される。

<自然との共生>を理念とする後背部の青い山並みと地域の植生を活かした住環境に、和洋折衷の佇まいが程よく点在する。西宮市目神山地区(2012年都市景観大賞)の魁となる優れた居住景観が形成されている。

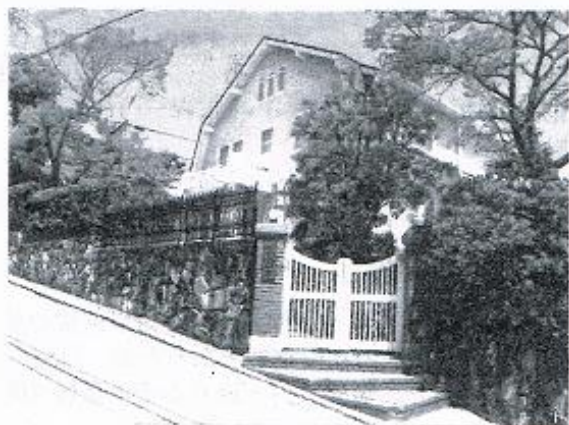
眺望が南に開けた最頂部山手地域には宝塚造形芸術大学(現宝塚大学)が1987年開学し、石切山を背景に階段状に配置された建築群は地域の良好なランドマークを形成。中腹の「高崎記念館」は、1923年に竣工の本造2階建マンサード(腰折れ屋根)様式建築で、開発当初の面影を留めるヴォーリズ建築の貴重な遺構。

水先案内人: 牧 彰(会員)

\*「高崎記念館」—W.M.ヴォーリズ設計の旧探訪館は、東洋食品研究所迎賓館として一般公開されている。

高崎達之助は東洋製缶(株)の創業者で、昭和の産業界・政界に多大な功績を残す。俗に、府立茨木高校(旧茨木中学)出身三伴人(他は川端康成、大宅壮一)といわれている。

\*宝塚大学—仏人建築家アンドレー・ボージュンスキー(ル・コルビュジェの後継者)設計。コルビュジェは、20世紀最高の建築家で、国立西洋美術館(世界遺産)の設計者。



「高崎記念館」の瀟洒な佇まい



「明月記」の大阪平野を一望する個室

## ◇春爛漫の花の宴「明月記」

〒665-0804 宝塚市雲雀丘山手2丁目10-11 ☎0727-56-7800

<有心のおもてなし>

四季折々の旬の素材の美味しさを生かした和を愛でる「創作京風懐石料理」のお店です。緑の本々を溢り抜けた雲雀丘の頂から見えるのは、何処までも続く大空と、眼下に広がる大阪平野。藤原定家の時代の京都嵯峨野をイメージした店内と、旬の素材の美味しさを存分に活かした料理を、どうぞ堪能下さい。

(「明月記」HPより)

○集合地: 阪急「茨木市」駅10時00分(時間厳守)又は「雲雀丘花屋敷」駅10時45分

○順路: 「茨木市(10:06発)」駅⇒「十三10:19着・10:23発」⇒「雲雀丘花屋敷(10:42着)」駅~町並み探索~「高崎記念館(11:30~12:30)」~町並み探索~「明月記(13:15~15:15)」~町並み探索~「雲雀丘花屋敷」駅(自由解散)

○参加費: 3,000円「明月記」食事代(飲物は個人負担) 会員外は資料代(100円)要

※会員には、会より1,000円の補助あり。

○定員: 24名(先着順)

○申込先: 「街ing いばらき」代表・阪田 浩(080-1436-9881)

※会員外の参加、大歓迎!

Tel&Fax/072-627-3480 E-mail/ibarakisakata@crux.ocn.ne.jp

※本会行事は、自由参加です。不測の事故・傷害などは、自己負担でご対応ください。

以上

## プロローグ

宝塚市の長尾山東端地域の山麓部に雲雀丘・花屋敷と呼ぶ住宅地がある。

明治後期から大阪の産業経済活動が活発になる反面、大気や騒音など住環境が悪化するのに伴い、都心部に暮らしていた住民が衛生的で健康的な住宅地を求めて郊外に転出する気運が高まりつつあった頃、郊外住宅地の一つとして候補地となった。

折しも、阪急電鉄の創始者である小林一三らが明治43年に有馬箕面電気軌道を設立して鉄軌道を布設し、郊外住宅開発に乗り出したことが気運に拍車をかけることになった。

この地区は、そうした社会的背景のなかで大阪で土地経営していた阿部元太郎が、神戸の住吉村の観音林（現在の御影、住吉川周辺）に土地開発をしたのち、大正4年にこの雲雀丘の地に自らの理想とするモダンな洋風の住宅地を創ろうと発意したことから始まる。

当初は1万坪から出発し、以降順次山手に向けて開発を進めていった。

一方、隣地である花屋敷（現在は雲雀丘山手地区界隈と川西市の一部になっている）地区は、東洋紡の社長をしていた河崎助太郎が花屋敷土地株式会社を設立し開発を行なった。さらに、大正12年には田中敷之助が、新花屋敷温泉まで現在の満願寺線に無軌道電車を走らせ、沿道の住宅開発を計画する

とともに、終点には炭酸泉が出たことから温泉場や遊園地などを経営し始めた（現在の花屋敷つじが丘地区）。

こうして、これらの住宅に商都大阪で働いていた鉄鋼関係、繊維関係の役員を中心とした人々が少しずつ移り住み始めることとなった。

雲雀丘住宅地を開発した阿部元太郎は、時代を先取りした理想的な街を創りたいという願いがあつたようで、自ら神戸の住吉村から移転して住居を構え、また開発にあたっては自然を愛し、山の傾斜地としての地形や樹木をできるだけ残した開発を意図し、土地の開墾、造成にあたっては今で言う特定約款として土地購入者に細かな条件を付した。

雲雀丘・花屋敷地区はお洒落な洋館が多く、高級なお屋敷町としてのイメージが定着しているが、阿部元太郎は当時から先進的な思想を持っており、この地に建てる建物は全て赤い屋根瓦の洋館にしたい気持ちがあつたようで、洋風のモダンなライフスタイルを志向し、外国の統一した町並みに魅力を感じていた（事実、和服がまだ主流であつた当時から妻や自らも洋服を着てまわりの人々を驚かせたようである）。

実際は駅周辺は和風の住宅が比較的多かつたが、後に述べる河野邸、安田邸、竹村邸、正司邸のほか花屋敷地区

の高添邸など多くは赤系の屋根瓦が施されて、住宅は赤い屋根にすべしと親戚の人に語っていたことを窺わせるものがある。

これら洋館が多く建っていることから推察すると、伝統的な日本様式であつた畳を主体とする坐式の生活様式から、板張り椅子式のモダンリビング生活への憧れが、中流以上の所得階層の人々にあつたことが時代背景としてあつたとも言えよう。

この地区の住宅は現存する建物や資料から、洋館を中心として、和洋折衷（洋館の部分と和風部分とが合体）の建物、純然たる和風住宅が、渾然一体となつた町並みを形成し、ゆとりのある敷地のなかに、自然樹木と植木職人によつて丁寧に手入れされた和風造園とがあいまって潇洒な佇まいを見せている点が目立った特徴となっている。

当時の住民もこの土地の自生の松、桜などの豊かな樹木や、猪名野平野をパノラマとして眺望できる景観、歩いて親しみが感じられる自然石積みと生け垣に、何よりも魅力と愛着を感じていた。

この章では、雲雀丘・花屋敷地区の代表的な建物などを無くもなつたものも含めてウォッチングする。

## ・ヴォーリスの手による洋館

現在高崎記念館になっている建物は、ウイリアム・メレル・ヴォーリスの設計で建てられたものである。大正12年（1923年）、諏訪榮一氏が医師として滋賀県近江八幡市の病院に赴任していたときにヴォーリスと出会う縁となり、設計を依頼した。その後、国務大臣となつて日中貿易など国政に深く貢献した東洋製罐の高崎達之助氏が購入することとなり、現在財団法人東洋食品研究所の迎賓館として保存されている。



高崎記念館

平成4年に2億円を投じて2年がかりで復元された。この建物はヴォーリスの数多い作品群のなかでも代表的な作品の一つで、木造2階建て腰折れ屋根のコロニアルスタイルの特色がよく表現されている。

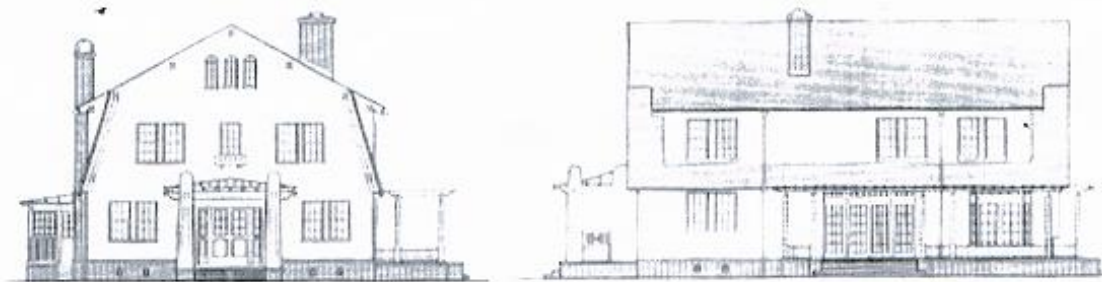
広い芝生の前庭、道路沿いは樹木が茂り、また敷地内にはライオンの彫像があり、大きな椰子の木がある。この木は高崎氏が植えられたようで異色の景観木になっている。雲雀丘地区では出色の注目を引く建物である。当時は、外国人の手による設計ということでも有名になった。雲雀丘地区にはこの他杉邸、旧堀文平邸がヴォーリスによって建築されているが、この記念館は最初の作品である。

高崎邸の真向かいには雲雀丘地区を開発した阿部元太郎の居宅があった。かつては大きな門構えにヒマラヤ杉が茂り、あめりか屋の施工によると伝えられる。当時では代表的な洋館であった。大きな石づくりの円柱の玄関があり、そこにベンチが置かれモダンな洋風の



パームツリーやライオンの石像が見える南門

スタイルをよく表現する建物であった。



高崎記念館の図面

宝塚市の長尾山麓雲雀丘の地の一角に位置する(財)東洋食品研究所公舎(高崎記念館)は、大正12年(1923)1月に大阪築港病院の院長であった医師諏訪榮一の住宅としてウィリアム・メレル・ヴォーリス(William Merrell Vories)の設計により建てられた。



ウィリアム・メレル・ヴォーリスは1880年アメリカ合衆国カンザス州レブンワースに生まれ、明治38年(1905)に来日し、当初は滋賀県立商業高校の英語教師を勤め近江八幡市に居を構えるが、その傍ら明治40年(1907)に近江ミッション(近江兄弟社)を設立し、キリスト教主義に基づく一つの事業として建築設計事務所を営んだ。

彼は敬虔なクリスチャンとして地域の人々とも親交を厚くし、また、音楽や絵画にも親しみ、それが高じて建築の分野にも関心を示したと推測される。

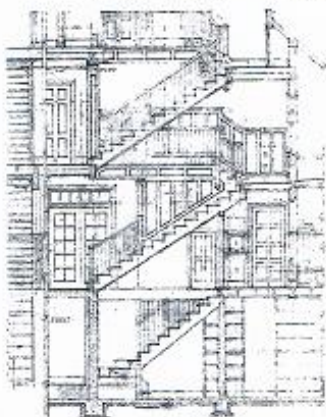
大正8年(1919)に日本人の一

柳満喜子と結婚し、昭和16年(1941)には日本国籍を取得し、昭和36年(1964)他界した。

近江兄弟社建築部は彼を中心にして数名の米技術者を加えて所員20人余りの事務所として発展し、当初は東京と軽井沢に支所を設置し、大正9年に「ヴォーリス建築事務所」を組織し活動した。

ヴォーリスの建築でよく知られたものには、大阪の大同生命ビル(大正14年)、大丸心斎橋店などの都市建築があるが、彼が最もその特色を表わしたものはキリスト教ミッションに関係した明治学院チャペル、大阪教会などの教会建築のほか、ミッションスクールの一群の建築があり、近在のものとしては関西学院(昭和4年)、神戸女学院(昭和8年)が代表的なものである。

また、彼は膨大な数にのぼる個人住宅を設計し、大正11年には住宅設計をテーマとした「吾が家の設計」



堀文平邸階段詳細図

という著作などを残している。

代表的作品の多くはコロニアル・スタイル、スパニッシュスタイル、チューダー・スタイルなど種々の様式を用いたが、その基本は今世紀初頭のアメリカで生まれたコロニアル・リバイバルの影響を色濃く残し、総じてアメリカンスタイルの住宅といえ、郊外型田園風景に馴染むデザインとなっている。

一方、日本人向けの住宅として設



堀文平邸立面図

計されたものには、日本の住慣習にも配慮し、洋風住宅のなかにも和室や玄関に和の空間導入にも配慮した。また、何よりも自然を愛し、緑の木立に囲われたところ休まる住宅をめざした。つまり、ヴォーリスの住宅はアメリカの住宅スタイルを基として、当時我が国が求められていた

モダンで潇洒な佇まいで、明るく健康的なライフスタイルにマッチするような中規模程度の住宅のありかたを示していたことが注目し得る。阪神間では特に彼が残した個人住宅作品は多く、神戸市東灘区の御影、西宮市の雲井町、芦屋市にあり、宝塚市内でも高崎邸のほか、林邸(仁川)が現存し、かつては雲雀丘には



雲雀丘花屋敷駅線路沿いにあった堀邸

この他堀邸、杉邸があった。彼の作品を見て回るのも建築ウォッチングとして楽しいものがある。なお、本原稿はヴォーリスの研究著である大阪芸大の山形政昭氏の了解を得て一部加筆し掲載した。



現在高碕記念館となっている邸宅の主であった高碕達之助氏は、昭和の産業界及び政界に大きな足跡を残した人物である。

明治18年2月、今の高槻市の柱本で父松之助、母ノブの次男として生まれ、大阪府立茨木第四中学校に入学した。そこで恩師の「日本人の生きる道は、日本の四面を覆っていない。日本にはその水産について世界で唯一の専門学校がある。それは、農商務省直轄の水産講習所である。」という言葉に感激し、水産講習所に入り生涯水産に携わることを決意した。

明治39年に水産講習所を卒業後、単身メキシコに渡り、4年余りメキシコやアメリカの缶詰技術の習得や市場研究を行なった。帰国後、大正6年に東洋製罐株式を設立、さらに昭和9年には製罐材料のブリキを生産する東洋鋼板株式を設立させるなど、製罐業界において先駆的活動を行い、その社業の発展とともに日本財界の一翼を担った。

昭和14年には満州に渡り、満州重工業株式会社副社長に就任し事業を展開、17年には満洲製糖株式の会長を兼任するが、終戦を迎え満州の日本人会会長になり抑留邦人の引き揚げに努力、昭和22年に帰国した。

昭和27年、電源開発総裁に就任、電力確保の面から産業復興に尽力し、佐久間ダムや御母衣ダムの建設など多大な功績を残した。昭和29年から政界にも進出、鳩山内閣及び岸内閣において通商産業大臣、経済企画庁長官、科学技術庁長官などを歴任し、日ソ、日中の経済交流に尽力するなど、日本経済の発展・繁栄に寄与した。昭和38年には衆議院議員に4回目の当選を果たしたが、昭和39年に79歳で亡くなった。

私生活では、大正4年に結婚して3人の子供をもうけている。長男は現在(株)東洋製罐会長兼(財)東洋食品研究所理事長の高碕芳郎氏であり、幼少時代を雲雀丘の邸宅で過ごされて

いる。



達之助氏と令嬢達

いた。

達之助氏は幼少の頃から大変活発で腕白な反面(家具家財にもいたずらを随分したそうである)、生き物に対して優しいこころの持ち主であった。



鯉と遊ぶ達之助氏と昌子嬢

たのも、老年になって政界にでるようになったことも、それぞれに理由があったに違いないだろうが、私は父に夢想的な性格がなければ起こらなかったことと思える。」と、未知の世界への憧れが全ての行動の原動力になっていたのではないかと述べている。

また、高碕氏は小林一三氏とも親交があったことから現在の宝塚ファミリーランドの動物園、植物園などの設立にも深く関係があったと思われる。

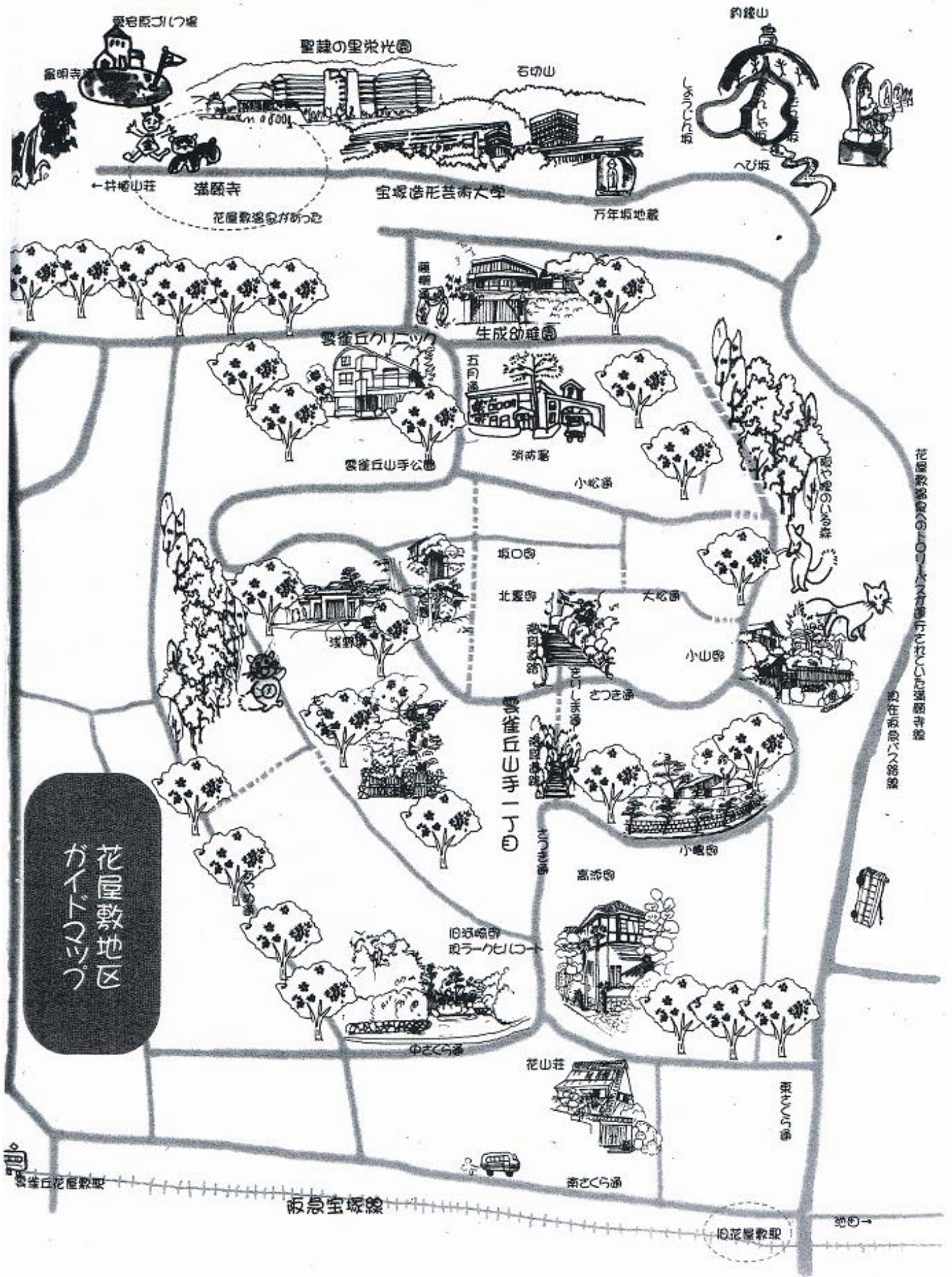
った。小さいものを大きく育てるのが好きだったようで大きな椰子の木も今は当館のシンボルとなっている。

また大変な動物好きで多忙な公的生活の暇を見てはワニ、ニシキヘビ、毒トカゲなどの爬虫類から小鳥に至るまで自ら飼育するとともに、ダチョウの卵の人工孵化を日本で初めて成功させ、伊豆のワニ園を指導するなど趣味の領域を越えた情熱を傾け、当邸宅にもワニの飼育池があった。

こうした幅広い活動について、芳郎氏は「水産講習所に入っ



亀に乗る昌子嬢



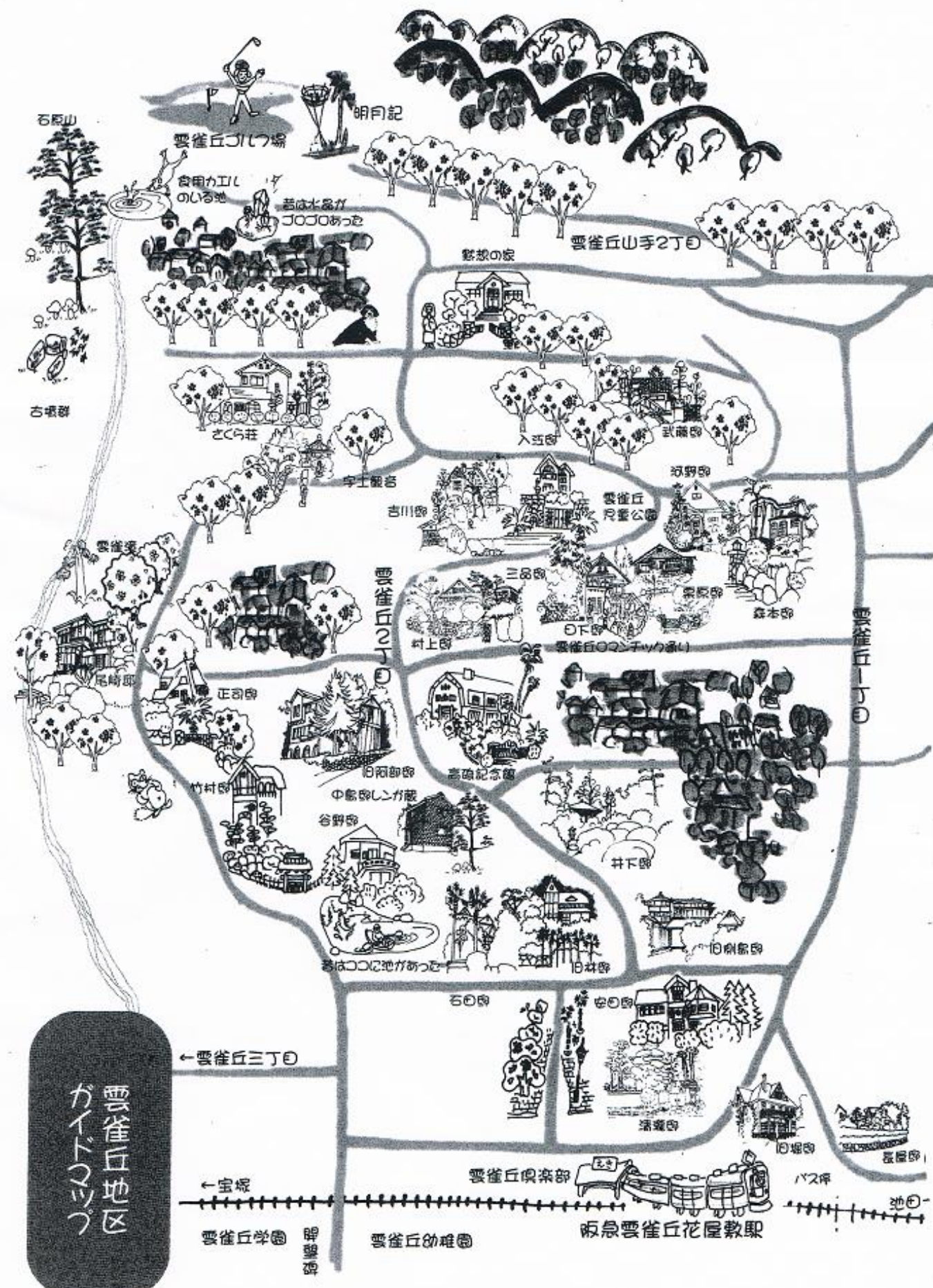
花屋敷地区の町並み景観を再現したガイドマップです。花屋敷地区の町並み景観を再現したガイドマップです。

花屋敷地区  
ガイドマップ

阪急宝塚線

旧花屋敷駅

北



雲雀丘地区  
ガイドマップ

←雲雀丘三丁目

←宝塚

雲雀丘学園 駅

雲雀丘幼稚園

雲雀丘俱樂部

阪急雲雀丘花屋敷駅

142号

池

## 「雲雀丘・花屋敷」地区全景

雲雀丘・花屋敷辺りは、長尾連山の東部方面にある南斜面の高台にあり、六甲の山並みを西に、池田五月山から千里丘陵が東に続き、遙か南の彼方に生駒、金剛、葛城の山々が大阪平野を抱えて霞む阪神間でも有数の緑濃い住宅地として知られる。

かつて、茅渚の海（大阪湾の古称）に通う千鳥の淡路島が浮かび、風を孕んで行き交う白帆が望めたという。



平成9年航空写真